
逝きたい人・へ

香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逝きたい人・へ

【Nコード】

N1028A

【作者名】

香

【あらすじ】

わたしは公園でたまたま知りあっただけの不良に惚れてしまいました、彼と付き合うことで怖いことも沢山知っていきます危ないことも沢山知りましたが、幸せでした逝きたい人、人を愛せない人、信じる事が出来ない人に読んで欲しいです少しでも何か感じていただけたら幸いです

第一部

桜舞ウ入学式ノ日

私は公園でせせこましく挨拶をしている母を尻目に
少し曇りがちな空を見上げた
こんな日くらい晴れるやね…

罪も無い天候に悪態をつきながら買ったばかりの携帯をいじる
新着メールナシ
寂しさが増す。

おめでとうくらい言ってくれる友達はおらんのかや…

鼻と口から空気がありったけ漏れる。

新しい制服も着て一時間で飽きた。

汚れようがシワになろうが気にもなくなり、地べたに座りこむと
ヒンヤリとした冷たさが背筋を震わせた。

母はまだ来ない

挨拶から井戸端会議へと変わった母達の姿はシバき倒したいぐらい
楽しそうだった。

後が怖いからやらないけど…

そのとき

『なんしちゅうが？』

「…は？」

後頭部から聞こえた外国語…でわれないが理解できない方言に
マヌケな声をあげる

と、同時に振り返ると…

派手な金髪が目に入る。

しかも逆さまで…座らずにもたれかかっていたベンチに人が座り話
しかけて来た。

しかも…男。

そして…不良…さん？

『聞いとん？』

「はい？」

首だけ後ろに反り逆さま、ダレた生首…に見える男と目が合う
…キツネ？

男の第一印象はそんなもんだった

「なんて言つたの？」

…やばい…タメ語だよわたし…

『だけん、何しちゆうがあ？』

理解できた。

「何もしてない…ですよ」

『そなん？暇なん？』

微笑とも言い難い中途半端な笑顔でわたしを見る。

まだ母は来ない…しばらく話した結果、金髪パツと見不良キツネ男
は広島人で友達の里帰りに興味について来てこの街にたどり着き観
光中らしい。

…話し方は友達のが移るらしい。

わたしの知らない世界にあまり興味はなかった…が。

逆さまキツネは実はたれ目で…まともに見ると…かっこいい。キ

ツネと言うよりは…子犬？

急に興味が湧いたのは顔だけではなかったことを弁明しておこうと
思う。

バイクがあつた。

カワサキと書いてある。大きく、かっこいい青いバイク

彼はよほど暇らしくわたしなんかと話し相手を求めて来た。無謀な
人だった。

しかしわたしも暇人だった

彼の押しもあり…

母に電話。あっさり了解を得た。子と思う母の愛情に悩んだ
ちよつとは 心配しろよ 『ねえ、名前なんて言うん？！』

「…え?!」

『なーまーえー!!』

「…なんて!？」

(ゴツツ)

「痛っつ!!!？」

『名前じゃダボ』

「…かおりです」

『クドいわダボ』

「聞こえなかったの!!」

『どんな漢字?』

「へ？」

『…』

「ごめん聞いてなか…っ」

(ガッゴツツ)

「痛っ!痛い!!」

今わたしはバイクにまたがり生まれて初めての二ケツを体験している。

男の運転は荒く、体全体でものすごいスピードを感じる

気分は…悪くない

だが、ヘルメットと風で会話は一切聞き取れ無かった

おかげで頭突きを二…いや…三発も頂いた。

まあ…信号で止まった後のわ自分の不注意だけ…

あと、ダボとはバカの意味を示しているらしかった

街中を通り過ぎ見たことの無い小さな公園で止まった。

小さな子供達が可愛らしく砂場で遊んでいる

わたしが降りると男も降りて、自販機に向かった

わたしは公園に入りブランコに座ると目に入る子供達の観察に集中していた

おままごと…かな?旦那らしき子が座って奥さんの作るドロ団子…
もといご飯を待っているらしかった。

微笑ましく、癒やしやんなあと考えてた最中

（ゴツッ）

「！！！？っ」

『アレ食べたいんか？』

「何すんの…」

『んっ』

「くれるん？」

『2つはのまんやろ普通』

「気持ち悪…」

『あ？』

「ゴメンナサイ」

『違う』

「…アリガトウゴザイマス」

『素直に飲めや』

「あい」

『…で？かおりの漢字はどんなやつなん？』

「えとね、香水の香に布を織るの織だよ」

『良い名前やな』

『香りを織るんや』

「ありきたりでいやだよ」

『いいやん？綺麗な名前やと思っで？かおり、』

「…」

『何？』

「いや…」

『何？俺に惚れたんか？』

「は？」

『俺モテるけのお』

「あ？」

『恥ずかしがらんでええけっ』

「有り得ない〜」

『そうなん？』

「キシヨ…」

『…ああ?』

「何でもナイデス」

『面白いやつぢやなあっ』

「喜んで頂いて結構ですわ」

気がついたら隣のブランコに腰を下ろし炭酸飲料を飲んでいる。

名前が綺麗だなんて…言われたの初めてで…気恥ずかしかった…

顔が赤くなつてないか不安になった…

涙が出そうになった…

自分がわからなくて…怖くなった

そっけない態度で自分をおさえこんだ。なんなんだろ…それからはいろいろあった。子供にまぎって砂遊びしたり

バイクの乗り方を教えてもらったり、楽しくて、時間が過ぎるのが早かった…

夜7時を回り…家まで送ってもらった…なごり惜しくて…わたしから番号を聞き、別れた。明日広島に帰るといつていた…

P M 1 1 : 0 0

携帯を見てしまう、かかってくるはずも無いのに

A M 0 1 : 0 0

眠れない。今日の男のことを思い出してしまう

A M 0 3 : 0 0

起きてるはずはないと思い、少しだけ鳴らしてみることにした。

緊張する。コール音が耳に響く

3コールめに、怖くなって切った。なぜか罪悪感がある。

もう寝ようと布団に入る

A M 0 4 : 3 0

着信に気づく。

切れた。

ビククリして携帯をみると…あの男だった

嬉しさで頭が真っ白で、言い訳を考えて無かった…

電話がつながると、『どがいしたんぞ?!』と言われ急に困った。

『なんかあつたんか?』

「いや…」

『おい?どした?』

「な…んしてるかなって思ってた…?」

『は?』

「…」

『今なんじよ?』

「4時…45分ですね」

『なんかあつたんか思ったがよ』

『電話しても出んしな』

「あー…ごめんなさい…」

『なんや?暇やつたんか?』

「起きてると思わなかった…」

『悪かったな起きてて』

「いや…ビックリした」

『…今日楽しかったなあ』

「あ?あ…うん」

『何あれだけ奉仕してかおりは楽しいなかったんかあ?』

「楽しかったです」

『やんなっ』

「名前」

『は?』

「名前聞いてない」

『言ってなかったけえ?』

「聞いてないわダボ」

『コノヤロ』

『…かずまさ』

「へ?かずまさ?」

『そう、かずまさ』

「…どんな漢字？」
『和風の和に大将の将』
「へえ…強そうな感じがする」
『やる？まあ俺強いしねっ』
「なん？」
『わざとやったら殺ス』
「ゴメンナサイ」
『わざとやっただんか』
「あー…うん？」
『おい？』
「うちらこんなんばっかやね」
『誰のせいやと』
「スミマセン…」
『ははっ謝ってばっかやな』
「誰のせいで…」
『あ？』
「嘘です」
『ははっ本当に面白いなっ退屈せんやん』
「…それわドウモ」
『なあ、彼氏とかおるんか？』
「なんで」
『男の顔が見てみたい』
「オヤスミ」
『悪かったって』
『ごめんてっ』
『おーい？』
「…なに？」
『で？おるん？』
「おったらかすまさまいたいなんについていかんわ」
『よおゆうた』

「ごめんなさい、いません」

『よし。俺と付き合ってみる?』

「は?」

『お前の耳腐つとんか』

「腐ってない」

「てか…冗談やめて、キシヨ」

『ゆうたなコラ』

『なんかかおり面白いけ付き合ってみんか思ったがよ』

「…」

『嫌か?』

朝、起きると。

携帯を見た…夢やないよね…彼氏いるんだよね…

うわ…恥ずかしい…変な感じ…

結局あの後、即答で付き合おうと言ってしまった…

ああ…失敗したかな…にやける顔で考える

自分が情けない…

一生の思い出に…

なるとは思わないまま、

わたしはただ浮かれていた。

第二部

初夏ノ日差シ二目ガグラム

和将と付き合うこと早3ヶ月、

遠距離ながら毎日電話やメールを取り合い。

週に一度必ず遊びに来てくれるのが一番の楽しみだった。

今日は和将とバイクで海まで行く約束だった。

家を出る時、親と喧嘩したわたしは、和将の遅刻を許せなかった。

腹の虫が悪い…と言うヤツだ。

電話がつながらない、メールも返ってこない…

何かあったんじゃないかと不安になる

やっと連絡がつくのは一時間後のコトだ。

じわじわと暑さを感じる 肌につつすらと汗がにじむ

彼は…汗でびしゃびしゃになってタオルを頭に巻いている

まくりあげた半袖…濃いめのサングラス。

日に焼け赤くなった肌

かっこいい…

怒りを忘れて見とれた。『ごめん!』

「あ…」

『待ったやろ!?!』

「心配した」

『本当にごめんな』

「何してたん?」

『あー…』

「言えないんや?」

『違つて!』

『いつか言わなあかんで思ってたんやけど…』

「なに?」

『…広島いかんか?』

「…は？」

『明日休みやる？』

「まあ…」

『決まりやな』

「そこに行ったら教えてくれるの？」

『見たらわかるわ』

「了解です」

『乗りやあ』

バイクは駅に乗り捨てた

いつもそうしているらしい…盗まれないのかな

電車に乗りほぼ二時間。広島駅に着く。まだ明るいがとくに午後6時間を回っている

肌寒くなってきた。和将は誰かに電話している

暇…知ってる人誰もいないんだよな…はぐれたら死ぬ…絶対野垂れ死ぬ！！

一瞬走馬灯が見えた気がした…そう言えば喧嘩してたんやっけ…座りこんで車道を見た。

車が多い、てか通りすぎ。車の何台かは窓を開けこっちを見ている…若い人ばかりだ

目の前で止まった車から男が二人出てきた。

和将はいない。電話に夢中になってわたしのことを忘れていらしい。

彼らはジューズをくれ、しばらく話しているとドライブに誘われた話をしているうちに急に頭がもうろうつとしてくる

男らがわたしに話かけてきているようだか内容が聞き取れ無い…眠…

話し声が聞こえる…この声は…和将…？どんどん遠くなる…

どこ…？

やかましい…体に音が響く

気持ちよく眠ってたのに…

「…ん…」

『起きたか?』

「誰…?」

『彼氏の顔もわすれたがか?』

「かずま…さ!?!」

(バシッ)

「痛っ!」

『お前はバカか?』

「…怒ってる?」

『なんで他人にもらったもんを口の中に入れるんや』

「あ…いや…」

『喉が乾いたなら俺に言えや』

「電話してたやん」

『あいつらに何飲まされたかわからんのか』

「ジューズ…」

『なんでジューズで倒れるがよ』

「急に眠くな…っ!!」

『ダボが…』

「あれは…」

『…あんま心配かけなやなあ…』

「はい…」

『違うやろ?』

「…ごめんなさい」

『よし』

どうやら自分は車の中に乗っているらしい。

しかも和将のひざまくらで横になっている…

わたしの頭を撫でる大きな手が気持ちいい。

わたし達は後部座席にいて、あと二人誰かが前にいる…和将と話しているらしいが内容は全く聞き取れない

笑ってる…また眠くなり、わたしは意識を手放した…頭が痛い…

『おい』

【大丈夫か？】

『起きろて』

『かおり！！』

『う…ん…』

『おい？』

『…！！！！っ』

『起きたんか』

『あ…』

『かなりうなされとつたがよ』

『う…』

【彼女起きた？】

『おお』

【オハヨー！かおりちゃん】

『は…誰？』

『キシヨ…』

『コイツは俺の…仲間。』

【かけるですっ はじめまして！】

【…ってカズよお…キシヨイは無いやろお…泣くでオレ…】

『えと…かおりです…仲間？』

『…俺の仲間の一人、あれでも一応22歳やから』

『…へえ』

【かおりちゃん驚かないの？！マジで？！】

『かけるの童顔みてびっくりせんやつおるんやなあ』

『別に…ど…』

『どうでもいいだけか』

『いや…はは…』

【そうなの！？そっちのが凹むな…】

『違…！…わないけど…その…っ』

【ははっ冗談だよっ！本当に面白い子だねっ】

『やろ？』

「…なに言っただの…」

『別にっ』

【まあカズのこと怒らないであげてなっ】

【コイツかおりちゃんをナンパしてたやつにすごい勢いで殴りかかっててね】

『おい』

【一人はもう伸びてるし、もう一人も大変なことになってよ】

【止めに入ったこっちまで殴られかけたよっ】

『やかましがに』

(ガッツ)

【痛てっ】

『ダボが…』

「かずまさ…手…」

『ああ…勝手に治るがよ』

「バカ…何も殴らなくても…」

『なんや？』

「痛そう…皮むけてるやん…」

「バカ…ありがとう」

第三部

私が気がつくと、綺麗な寝室のベッドに寝かされていた
殺風景だけど高価そうな家具が並んでいる。

和将とかけるは、わたしが仲間？と訪ねると、バツの悪そうな顔で
ゆっくり話し始めた

どうやら彼らは広島暴走族らしい

規模の大きなチームらしく沢山仲間がいると言っていた
そして… かずまさは副頭… NO.2にあたる人物らしい

引いた…？と聞かれ、わたしは少し考えた

和将は好き…何をしてても和将は和将かな…

あまり深く考えないわたしはその結論に異議は無く、正直に言っ
てくれたことにお礼を言った

和将は微笑み、わたしの頭を撫でてくれた

わたし…和将の手…大好き…

もつと好きになれそうな気がした。

ただ、かけるはカズを見ながらニヤニヤしている

和将はそれに気づき、（ゴッ）と頭突きをかました

それからは三人でご飯を食べ、和将らの用事にわたしもついて行く
ことになる

未知の世界の扉を開けるほんの始まりに過ぎないことだった

「耳が痛い…」

『あー？』

「耳痛い！ー！」

『ははっ！』

『そのうち慣れらや』

「その前に中耳炎で死ぬ」

（ぼすっ）

『かぶつとけや』

「前見えない…」

『高いんやから汚すなやあ?』

「かけるに売る」

『いくらで?』

『俺のプレミア付きやど?』

「…千円?」

『ひこずりまわすか』

「大切にかぶります」

『おし』

そんな会話が楽しくて周りの騒音…

もとい…バイク、車の音が気にならなくなってきた。帽子のおかげ…?

怖い…本当に怖い…トイレに行った帰り、いかつい兄ちゃんが喧嘩している所に出くわした。

《なんやこら!》

《ああ?!》

一人がすごい喧騒で叫んでいる

その相手はものすごくゴツい…おじ…?いや…お兄さん。

何も言い返さない…何でだろ

トイレの割れた小窓から見ているわたしは、早く終わるのを願ってただ見ている…。

大きな音がした

しばらくしてそつと覗いてみると…

大声で叫んでいた兄ちゃんがうずくまっている。

その時

…大きな人と目が合った…

殺される?

死ぬ!!

しゃがみ込むわたしに気づいた大男は…《もう大丈夫じゃけ出て来てかまんよ》

それだけ言つと、足音が遠のいていった…

急いで和将の所にもどると、遅いと怒られた
言い返す暇もなく大きな声がした

「ヤマザキ！！出てこいや！！」

《はい》

「表でころがつとるアレはなんじゃあ」

《目つきが気にいらないと言われまして》

「それで手え出したんか」

《いえ、これを持ってました》

「…シャブか」

《胸ポケットに入っていました》

「ちっ…クソガキが…」

「詳しい事は後で聞くけえ、すまんかったな」

《はい》

《失礼します》

静まり返った海岸ばたの倉庫の中は、声が良く響いた。

わたしは和将にあの人ら誰？と聞くと

でかい方が山崎たかまさ、仲間の一人らしい。

そしてこの騒がしい場を一瞬でおさめた彼は…

加賀城大志、このチームのリーダーでNo.1だと教えてくれた

物腰やわらかそうなお兄さんだった…

短めで揃えられた綺麗な黒髪

黒いシャツに大きめのGパン

顔は…かなりいいと思う。

さわやか系の面構えで、…口の悪さがなかったら…と思うと少しへ
こむ自分がいた。

第四部

薄暗ク肌寒イ夜

大勢の仲間が集まるこの日を集会、または会合と呼ぶらしい。

そこに彼女達は居た

濃い化粧

濃い性格

薄い眉毛

レディース…？

逃げたい…

頭の中はただそれだけだった…

和将が大志さんに呼ばれ向かった

約五分後。

わたしはそんなお姉さん達に囲まれていた。

若い。可愛らしい。面白い。

と言つては頭を撫でくり回し、髪の毛をいじくり、化粧を試みた

いと頼みこんで来る。

悪い人達でないのはわかる

だが…いかつい姉さん達6人に囲まれては…笑うに笑えない

その中でもリーダー核の由実さんは、かなりの美人だと思う

彼女は、5人の姉さん達の勢い余った行為を止めてくれた

わたしの頭を撫でながら、自己紹介と自分達がいる理由を教えてくれた。

どうやら彼女はチームの中に彼氏がいるらしく、顔を合わすうちに仲良しになったとか何とか…

和将の…一応？彼女のわたしが気になっていたと言つ。

…もしわたしがチャラそうな女だったならシメ上げられていたそうな。

怖いつて…

しかも…由実さんは…あの大志さんの彼女…なぜか大志さんの方に嫉妬感を覚える…

こんな美人を…

話をしているうちに一番年下のわたしに優しく話しかけてくれる彼女達を好きになった

特に由実さん！！

すべてが完璧に見える…特にEカップの乳が…わぁ…でかい…

番号をすごい勢いで6人と番号を交換し、姉貴分が一気に出来た嬉しかった。受け入れてくれたことも、対等に話かけてくれることも

全部和将が誰かと一緒に帰ってきた…

…

…

…

……！！！！？

大志さん！！

「この子が香織ちゃん？」

『そっ』

「…犯罪にならんか…？」

『ばっ！！』

『そんなことねえがよ！！』

「冗談やってっ」

『シバくぜよ』

（バシッ）

「痛っ！！」

「こんボケッ」

（ゴッ）

「お前のは痛いんじゃないけん手加減せえゆつとるやろが！」

『じゃかあしやこんダボ！』

「…あ…の？」

「あ、ごめんなあ！」

「こんボケナスから聞いたと思うけど、オレ一応頭じゃけん」

「大志つつうんや！よろしくうなあ！」

「はあ……」

『相手にせんでかまんがよ』

『コイツただのダボやが』

「なんやて？」

なんや！大志なんでこないなとおんの？

「由実：彼氏に冷たくないか……？」

うちの存在見えてなかったくせにい なんやったら和将のアホ
タレと付き合うたらあ？

うちは香織と付き合うわっ

「だってよ？」

『由実ちゃんかんべんしちくりやあ』

『こないなアホおれの手えには追えんがよっ』

「こつちが願い下げじゃあ……！」

……うちらも大変やな……

「……そつすね……」

男2人が楽しそうにじやれている姿は可愛い

その日、わたしは姉さん達に飲みに連れ出された。

かなりのハイテンションに拍車がかかり大騒ぎになった。

疲れ果てて和将の元まで帰ると、和将の様子がおかしかった

何かあったのかと聞くと、ため息混じりにゆっくり話し始めた

……チームの仲間の中に薬をしている人間がいるらしい

名前が上がり次第

破門：切り捨てなければならぬと辛そうに語る和将が顔を上げな
くなった。

冷蔵庫からビールを取り出すと流し込む様に飲み始めた

煙草を深く吸うと、ため息のように煙を吐き出す

切なくなつて、わたしは和将の頭を撫でた

辛そうな顔が少し和らぎ、はにかんだような表情に変わった

心臓が跳ね飛んだ

顔が熱い…

『なん？』

「え？」

『酒のんだんか？』

「う…うん」

『顔赤いでっ』

（ぴたっ）

「！！っっ」

『ほっぺた熱っ』

「手え冷た…」

『うりゃ』

（ぺちっ）

「ひゃい！！」

『はははっ』

『疲れたやろ？もう寝ないや』

「…うん」

第五部

ソノ日ノ朝ハ黒イ雲ガ印象的ダツタ

AM 8:00

大きな音で飛び起きた

(ドガシャンツ)

「?!」

「…なに…?!」

『うわっ』

「和将?」

「なにしてんの?」

『こつちくんナ!』

「へ…?」

『やめんかや!』

「何…?」

『ちよ…!!おい!!そつち行くな!!』

(ギイ…)

「あ…?」

「ガウツ!!」

「あっ!!!!」

(ボスツ)

「ギンジロ!!」

「ガウウ!」

「くすぐつたいよ?」

「家の中に入れてもらったの?よかったねえ!!」

『あゝあ…遅かったがね…』

「…ギンジロびしょ濡れやん…」

『一緒に風呂入つとつたがよ』

「へえ…!!?」

「ちょ…裸でうろつかないでや!!」

『タオル巻いてるやん』

「ちゃんと服着て」

『…一緒に入るが?』

「絶対イヤ」

『力いっぱい拒否んなや』

「…ギンジロあとで一緒に入るかつ」

「ガウ」

『おい、ギンはオレと入るんやがなあ』

「イヤよねっ乱暴に洗われたんやろ?」

「ガウッ」

『おい…』

「早く服着て来てや〜?」

『…了解』

ギンジロ…和将の家でのただ一匹の同居人。…いや…同居犬

昔道路に飛び出て来たギンジロを…バイクでハネたらしい

すぐに病院に連れて行き治療しているうちに情が移ったそうだ。

ギンジロの白い毛は今でも首すじの一部がハゲていて、そのせいか
鳴き声がかすれている

その声のシブさから銀次郎…と書いてギンジロと命名されたのこ
と。

ギンジロとお風呂に入り、ドライヤーで毛を乾かしていると和将が
ギンジロのご飯を持って来た

美味しそうに食べるギンジロを見ていると和将は

お前のエサはこっち

とキッチンを指した

…エサ?

聞き流せなくてしかめっ面のわたしの表情は、豪華な朝ご飯を目の
前に一瞬で笑顔へと変わった

これは和将が全て作ったらしく、意外な特技にかなり驚いた

しかも…わたしが作るより…おいしい。

和将の仕事は親の仕事の引き継ぎの教育を受けることらしく親の会社の元で働いているらしい。

何の会社なのかは教えてもらえないけど…この自宅は…すごいと思う。

全体的にシンプルながら…一人で住むには大きすぎると思う

今日は和将も休みで、ドライブに出かけることになった

和将の言うことが理解できない…行きは車。帰りはバイク…なんで？

お昼はチームの仲間が働いているお好み焼きの店に寄った

扇風機が頭上でフル回転している

かつお節がたまにフワフワと飛んでいく

広島のお好み焼きに驚いた

味も驚いた

わたしのは…キムチ入りでもものすごく辛い

店を出たところには唇は真っ赤だった

和将はたまに指でわたしの唇を遊ぶ

引っ張ったりはじいたりつねったりしながらしかめっ面になるわたしを見て笑う

でもキスなどは一切ない

わたしに魅力が無いのはわかってるけど

たまに顔が近くなると緊張してしまう自分が嫌だ

その後は公園でハシヤぎすぎて和将が川に落ちたりそのままわたしも引きずりこまねず濡れのまま近くの古めの商店で水鉄砲や水風船、あと大量の駄菓子を買う

一時間後にはびしょ濡れになり疲れ果て2人で駄菓子をむさぼった会話は絶えず続き、帰る頃には口が疲れていた「…車大丈夫なの？」

『余裕』

「あの車庫はかずまさの車庫なの？」

『似たようなもんやがね』

「…なんじゃそら」

『気にすんなっ』

「これからどこ行くの？」

『銭湯行かななあ』

「わあ、助かる」

『服もどうにかせなあ』

「家戻る？」

『まさかつ』

「じゃあ？？」

『買うんやが』

「は？」

『あと十分』

「へ？」

…香奈さんが離れない…

あのハイテンショングループの一人…香奈さんはショップの店員だった

しかもわたしを見つけたとたん…抱きついてきて…離れない

可愛い人でなぜかこっちまで笑顔になってしまふ空気の持ち主だった

和将が、メンズに行くから適当に見つくるってて
と言い捨てると香奈さんの目が光った

着替え十数回

撮影…何十枚

今日店長さんが居ないことが恨めしく思えた

好き放題する香奈さんでさらに疲れ、約30分。

やっと服が決まった

撮られた写真は…何も言うまい…

和将が帰って来て…やっとわたしをいじくる手が止まった

疲れきったわたしの顔を見て吹き出す和将…あとではたいちやる…

銭湯から出て新しい服に違和感を覚える

この服おとなっぽすぎなんじゃ…

急に不安になって出るのをためらっていると和将から電話がかかって来て

早くしろと怒られた

しぶしぶ出て行くと…わたしが驚いた

いつもと違う…

濃い深緑色のGパンと黒い半袖パーカー

シンプルだけど…

似合いすぎ…

和将がこっちに気づいた。

近づいて来るだけなのに緊張した

いきなり腕を掴まれ外まで引っ張られた

遅かったコトに怒ってるの…？

と聞いても答えてくれない

それどころか…こっちも向いてくれない…

不安になった

外に出ると急に止まった和将が誰かに電話し始めた

相手は香奈さんだった

服の露出がどうのこうのと話していた

露出といっても…ぴっちりとしたTシャツの胸元が広めに開いているだけだ

…スカートも膝上程度の長さで…短くスリットが入っている。

ただそれだけだった

途中で電話を切られ悪態をついている和将と目が合う

変かな

と聞くと

いや…

と短く帰ってきた

しばらく沈黙が続き小さな舌打ちが聞こえると同時に和将がパーカ

―を脱ぎわたしに投げつけた
着とけ

バツの悪そうに言う和將に素直に従うとやっといつもの和將に戻った

…わたしは出すことすらできないほど魅力の無い人間らしい
時間を戻せたら…どれだけの人の涙を無くすことが出来るんでしょ
う…

和將の携帯に電話が入ったのが一時間前

大志さんが事故に合った

即死だった

病院に来るように

電話は内容だけ伝わるとすぐに切れた

和將の顔色が変わる

バイクが病院に着いたのが30分前

霊安室で簡易ベッドの上に横たわる大志さんを見つけたのは十五分
前

泣きわめく由実さんをお医者さんが連れて行ったのが五分钟前…

そして今…沢山の人が駆けつけ、泣いている

暴れるように泣く人

大声で泣く人

今だに受け入れることが出来ず、遺体に飛びつく人

沢山の人の中で

和將はただ立ちつくしたまま動かない

掛ける声が見つからない

病院に迷惑がかかるこのことで

解散命令が出された

和將は何も言わないまま手を合わせ、

帰るぞ

と言わたしに言った

家に着いたところには雨がパラついてきていた

和将は力なくベッドに座り、煙草を耐え間なく吸っていた
雨が気になりギンジロを家の中に入れてあげた。

ギンジロと向かい合い大志さんのことを思い出した
病院でかけるから聞いた話では…

薬をしている仲間と話しをして、帰る途中の出来事らしい
スピードの出し過ぎによる追突事故

頼りになるやつ

面白いやつ

憧れの対象

大きな存在

一番が似合う男

彼の話しが出る時、かならず出る尊敬や賛美の言葉

全てが過去になってしまった現実は、重く深くみんなの上にのしか
かった…

第六部

雨ハ涙ノヨウニ雷ハ怒リノヨウニトチ狂ッタ空ヲニラム

「…かず…まさ？」

「どこ行くの…？」

『ちよつと用事』

『すぐ終わるけえ…待っててや』

「…バイクで行くの？」

『ああ…』

「…気をつけてね」

『大丈夫やがよ』

「…行つてらっしゃい…」

和将は急に立ち上がり

わたしの方に歩いて来た。

香織は…オレのこと好きか？

うん…、と答えると和将はため息まじりに困つたような顔をした

わたしは和将にとって邪魔になつてゐるのかな…

和将は用事を済ます為に出ていつてしまった。

その時気づいた…

わたし和将のことに深入りし過ぎた…

きつと嫌になつたに違いない。

一度そう思うと、妙に確信めいたことに思えて来て…

ここに居るわたしがみじめに感じた…

バイバイ、ギンジロ…

荷物をまとめ、外に出ると大粒の雨が絶え間なく降り続き…広島から出て行けと急かされている気さえした…

バスの中では何も考えることが出来なかった。

眠ることもなくただ流れる景色を見ていた。

家に着き、荷物を降ろす。

降り続く雨を見て、ようやく涙が出てきた。

広島もまだ雨は降ってるのかな…

そんなことを考えながら和将からきたメールを見ていた
あまり絵文字を使わない和将の飾らない文章

たまにハートが付いているとたまらなく嬉しかったなあ
などと考えながら和将へとメールを打ち出した。

“今までうちみたいなガキに付き合わせてごめんね　大志さんの
ことでも慰めたり出来なくてごめんなさい　わたしには和将を幸
せにしてあげれません　元気でね”

送信しました

携帯の画面が待ち受けに戻り約3秒後

（プププーッ！）

夜中の一時。

車のクラクションが鳴り響く。

いつまでも鳴り続けるので窓をすかし覗いて見ると…

黒いボックスカーがわたしの家の前に…

「！！！？っ」

由実さん…と…かける…ビックリして窓を全開に開けてしまった。

後悔してももう遅い。

ポストに鍵を入れっぱなし…と言う話しをかけるにした覚えがある…

部屋の位置を認識されてしまった。

足音が近づいて来る

（ボタン）

（ガバッ）

（ドサッ）

「由実さ…」

ばか！！なんで急におらんなるん？

みんな探したんよ？！

心配したやない…

「あ…」

【由実姉が一番心配しててんぞ？】

「ごめ…なさい」

和将がなんかしたん？

あんボケナスうちのかおりになんしたん！？

【あんたのやないやろ…】

……

【ごめんなさい】

「あの…」

「わたしが勝手に出て行っただけで…」

「和将は何も…」

【あんな…和将今警察んとこおんねや】

「は？」

あのバカファミレスの中で三人に重傷おわしてんよ

「なんで…」

「もしかして大志さんの…？」

そお…

【警察がパクリ来るまで殴りよつたらしいんや…】

お願い！！かおりちゃん…帰ろう？

【ここがかおりの家なんじゃ…】

やかましがね…

【すみません…】

「でも…」

「うちなんかが行っても…それに…由実さん…大志さんのことは…」
「？」

過ぎたバカのことより今はあんたのことよ！！

心配かけて…

「ごめんなさい…わたしなんかで役に立つんだったら…行きます」

おい…学校は？】

「休みます」

1日くらい変わらんとてっ

【おい…】

メールを送ってしまった後なので…和将になんと説明しようかと考えながら車の中で由実さんにもらったおにぎりを食べる

煙草の煙が充満している車の中、外が見えず、今どの辺りを走っているのかさえわからない…高速に入ったことはわかった。

スピード出し過ぎ…由実さん急かし過ぎ…今何キロ出てるの!?

ブレーキがあまり使われている気がしない…

二度とかけるの車には乗らねえ…気持ち悪くなってもうろうとする頭の中そう誓った…

バスの半分以下の時間で広島に着く

和将は朝には帰って来るらしい…早すぎくないか…?

和将の家に入るとギンジロがかけ寄ってきた。

しおらしくわたしを見上げる様が可愛かった。

抱き上げ、頭を撫でる

由実さん達の方を振り返るとげんな顔でこっちを見ている。

ギンジロが和将以外の人間に抱かれてる…

珍しいことらしく、和将の犬だ。と確信づけるものになったそうだ。

寝室の扉を開ける。

…携帯が…和将の携帯が置いてある!!…開いてみると…

新着メール一件

早速消した。

助かった。

安堵の息が漏れる。

後は帰って来た和将に謝ろう。

お腹が減っているであろう彼の為にご飯を作ろうと思い、キッチンへと向かった。

第七部

(ガチャ)

(ボタン)

『鍵…』

『誰かおるんが?』

『…かおり?』

『おい…?』

『寝て…』

…『ぶっはっ』

『はは…なんじゃこれ』

『待っててくれたがね…』

『…ありがとおな』

目が覚めるとギンジロがわたしの腕まくらで寝ていた。

そして隣ではわたしに抱きついて寝ているのは…由実さん…ち…

乳が当たる…そして動けない…

あれ…?シャワーの音が聞こえる…

かける帰ってきたのかな…?

どうやって起こさないように動くべきか考えている最中…大きな音がした。

(ガチャ)

(ドスドス)

(ドガチャンツ)

…ビックリして起き上がると、そのままバスルームに向かった…ドアは開けっ放しで…中には…裸で立ち尽くす和将と…それにしがみつく…かける…

ミテワイケナイ

「…失礼しました」

ドアをそつと閉め、帰ろうとすると由実さんが起きてきた。
今見ない方がいいと伝えたが。お構いなしにドアをプチ開けた。
一時間小、由実さんの笑い声はおさまらなかつた。。。
しばらく、和将とかけるはホモと呼ばれることになる。

謝るタイミングをすつかり失ったわたしは、今楽しくみんなで食事
をしている。

いつ切り出そう…

考えても言い出せない…

4人＋一匹でわたしの作った料理を食べている
不思議な光景に見えて来た

100%一般人のわたしが暴走族の幹部と食事……………なんか面白く
なつてきた

そんなことを考えてた最中。

和将の手を見た。瞬間……………何かがプツリと切れた。

「…和将…その手」

『あ…？コレがや？』

「血まみれなんだけど」

『皮べロつてむけたけえの』

汚い

【由実姉ひとつ】

「そんなことはどうでもええやろが」

「和将：なんで手に傷なんかつけとんの？」

「わたし言つたよねえ」

「手に傷をつけるなて。」

「知りませんでしたや済まさんよ」

「ちょおこつち来なあや」

『か…かおりさん？』

（ぎゅううつつ）

『痛っ！！痛だだだ！！』

(ドスンッ)

(バタバタッ)

(バタンッ)

.....

【痛い...】

かおり...

耳をさすりながら、かけるが和将の寝室を見つめる

その寝室に和将を引きずり込んだわたしは、和将をシバきつつ手に薬を塗り、包帯を巻いている最中だった。

和将の手を見ていると...なぜか悲しくなっただけ涙が出てきた。

見つからないようにうつむいていると...和将に抱き寄せられた急なことでビクリして和将の名前を呼ぶが、うまく言えない。苦しい...息がうまく吸えない。

でも...混乱する頭の中でただハッキリとわかってるのは...

好き...死ぬほど好き...ずっとこうして居たいよ...

ふと、力が弱まった

和将...?

そう呼びかけると

頭の上で低い声が響く

『ごめん...』

『かおりに心配かけた...』

『最低やんな...七つも年下の女に...辛い思いさしてしもった』

「そんなん」

また力が入る。

強制的に口を塞がれてしまった

『...一生大切にするけえ...』

『ずっと一緒におってくれ』

それからいろいろあった。

沢山の推薦により和将がリーダーになったり。

それから数ヶ月、和将は父親の会社で昇進し、人を動かす立場になり、愚痴も沢山増えた。

そしてわたしは家を出て、一人暮らしを始めた。

実家から少し離れた場所でバイトをしながら学校へ通っている。なぜか和将も住む。

と言い出し、家賃半分で綺麗なマンションに住んでいるのだが…和将は週に一度寝泊まりするくらいであまり意味がない。

彼なりの優しさがくすぐったいと思う。

広島にはちよくちよく顔を出したりしているが…一番大きな変化は…かけると由実さんが付き合いだしたコトだ。

2人の間でいろいろあったらしく…

結局かけるは大志さんを越えると由実さんに約束したらしい。…大変だ。

和将が頭になったチームにも沢山問題が出てきた。

和将と遊ぶ時間が少なくなるのが嫌だったので何かあるたび着いていくことになった…

後悔しても…もう遅いのに…今でも後悔して病まない事件が始まる。

第八部

眩しい日差しが脳ヲ焼ク

殺シテ：

その一言が耳に残る。

この人達はどこから道を踏み外したんだろう。

太陽も眩しい残暑の昼下がり、和将がファミレスで殴り、重傷をおった元・仲間も病院を出て来る時期になった。

仲間達に内緒でわたしを連れて、一度だけ見舞いに行ったことがある。

和将は入院費を渡しに行くと言っていたが…
本当の所心配はしているのだと思う。

元：仲間だから。

『起きちゅーが？』

（ガラガラ）

《カズさん！？》

『おー。』

『調子どがいなが？』

《…すみませんでした…！！》

『なんや？』

《あの…》

『…手え切ったんか？』

《あ…》

『リストカットか…』

《薬は…もう止めて決めたんです》

《俺なんかんこと心配して…雨ん中来てくれた…大志兄さんに…》

《一生かけて償うて行こう思てます》

『…そか』《カズさんにもよおけ迷惑かけてしまいました…》

『かまんがや』

『あん時おつた連れらは病室別なんか?』

《逃げました》

『そおか…もう関わんなよ』

《…はい。》

和将は帰る前に何かを言いかけ、やめた。

きつと…仲間に戻ってこないかと言いたかったのだろう。

病室を出た後、しばらく無言だった。

病院を出たところに、わたしのカバンが無いことに気づいた。

病室に忘れて来てしまった……

和将にバカにされつつも、単身急いで彼の病室へと走った。

病室に近づくと話し声が聞こえた。

電話中らしい。

病院で使うなや。。

しかたなく、終わるまでドアを開けずに待つことにした。

その時…聞くつもりは一切無かったのだが…聞こえてしまった…

《金魚》《明日の午後十時》《佐伯の家で》《3…》

途切れ途切れでしか聞こえなかったが…確定だった…この人は…ま

だ薬をしてる…

間もなく電話は終わり、勇気を振り絞って部屋の中へ入る。何事も

無かった様な顔をして迎え入れてくれた

カバンを取り。

部屋を去ろうとすると、止めておけば良いのに電話のことを聞いて

おきたくなった。

振り返ろうとしたその時……足がもつれ、派手にぶちこけた

おでこをモロに打った

わたしが両手で額を押さえうずくまると。

彼は、大丈夫?!と心配してくれたどころか、立てる?怪我はない

?と優しい言葉までかける。彼の手は暖かく、笑顔は優しかった…

お礼を言い、ドアの方へ向き直ると、彼の声が聞こえた気がした。

なにか言いました?と振り向くと

困ったようにはに cand 顔が目に映る…あう…

この表情には見境なく弱いらしい…

和将の所まで帰ると、遅いと怒られデコピンをくらった…
瞬間。

額を打った痛みが蘇った。

『そがいに痛かったがや?!』

『おい?』

無言でうずくまったわたしはしばらく動けないでいた。

…数時間後

病院で怪我をしたわたしは由実さん達に笑い話として話されることになった…

…和将によって…

帰る途中。

あの病室の人はどんな人なのかと和将に尋ねてみた。喧嘩は弱いが、周囲に気配りの利く優しいヤツだ。

と目を細めつつ説明してくれ、薬も始めは悪い友人に進められて断りきれずに…と言うことも聞いた。

まあ俺らも良い友人って訳でもねーがね。

と笑っていた。

どこにでもいる普通の人だった。

その人が薬をしている…

受け入れられない現実が頭の中でぐちゃぐちゃにからまっている…

結局、和将には言えずじまいで、そのまま自宅に帰った。

その日はまるで寝れず、布団の上でゴロゴロとしているだけだった。

第九部

ムセカエル甘イ香り二変ナ汗ガデル

忘れてた…人生で一番嫌いな日。

わたしの誕生日。

母が気合いを入れて作ったケーキ。

サイズ15号

親戚の姉が持つて来たケーキ。

サイズ8号

友達が毎年くれるケーキ。

数4個。サイズ五号以上。

和将がくれたケーキ…二段。

：

：

ふざけんな。

甘いモノが嫌いなことを毎年毎年何回も言っているのに。

なぜか今年も部屋はケーキだらけになる…。

気持ちは嬉しい…だがチリだって積もるんやがよ。

後輩がケーキを持つて来た時はすべて食べ尽くすまで見張られた。

胸やけ、吐き気に襲われ。ケーキをどう始末つけるか悩んだ。

かけると由実姉さん達に食べてもらおう！

暇な人。と言う条件で呼んで見た。やる気でかけると由実さん達は

わたしのマンションまで来た。酒を持つて…

宴会が始まる。

減って行くケーキに喜びを感じていると暴れん坊將軍のテーマソン

グが聞こえた。

かけるが携帯をいじると曲は止まった。

なんとも言えない趣味だと思う。

かけるの笑顔が深刻な表情に変わった。

急に立ち上がるとわたしを呼んだ。

かけるの方へ向かうと、和将が聞きたいコトがあるからわたしを広島まで連れて帰って来てくれとのこと。

かけるが急いで?!と急かすので何かあったのかと思いそのままかけるの車に乗り込んだ。

…数時間後和将の自宅に着き呆然とする。

『誕生日おめでとう!』

【よ…よかったやん?!】

『もつと嬉しそうな顔せえや』

『騙したくせに』

『普通に呼んだら由実さん達取って来いひんやん』

「…で?このクソデカイケーキは?」

『この前のじゃしよぼすぎやん』

『喜べや』

『デカすぎ…』

『誰が食べるの…』

『お前』

「ふざけんな」

『ああ?!』

「なん?」

「まさかとは思うけど」

「わたしが甘いモノ嫌いなのを忘れてない?」

『は?!』

「クソばか…」

『うせやん…』

久しぶりに和将の手料理を満喫していると、かけるが何の気なしに話題を振って来た。

あいつ今何してんだろなあ

…は?

ほら。あの…

ああ。あいつか。

さあな…全然連絡取ってねえが…

…わたしは“あいつ”が誰か想像が付くと同時に青ざめた。
病院での電話の内容を話すの忘れてた…

しまった…言わなくちゃ…でも!!

和将はなんて思う?…怒るかな…

…怒るよね…

…なんて言おう…

彼まだ薬してるみたい…?

悪い仲間とまだ連絡取ってるっぽいよ…?

病院で立ち聞きしちゃいました…?

…考えがまとまらない

そんなことを考えながら、フォークでグラタンを無意識にかき混ぜていた。

和将がわたしを呼ぶ声がしだいに大きくなる。

かおりっ!!!!!!

ビックリし過ぎてフォークを落としてしまった。

ふとグラタンに目をやる。。

和将の自信作の見目麗しさは、後形も無く消えてしまっていた。

『どしたんぞ』

『顔色悪いがよ』

『風邪でも引いたんが』

「あ…いや…」

【気持ち悪いの?】

【寝室行く?】

「大丈夫…」

『なんや、次は何でなやんどんや』

「…っ!」

「悩んでなんか!」

【…嘘つけないんだね…】

『隠しきれんもんを無理に隠そうとするからやが』

「…あ…その…」

『なんや』

『うんこか？』

「…あ？」

『なんや我慢しとんやねえがや』

「違うっつの」

「ご飯中に汚い。」

「くそばか」

『自分だつてクソゆうつたやろげつ』

「微妙に意味が違うの！！」

『クソはクソやがよ！！』

『それ以上になにがある！！』

「クソクソ連呼すんなバカ！！」

「かけるも何か言つてよ！」

【…うんこ我慢したら体に悪いよ？】

「ありがと…殺意が芽生えたよ…」

【顔笑えて無いよ…】

『うんこの話しまだするんがや』

「あんたのせいでしょ」

『…ゴメンナサイ』

後日談、その時わたしの目の中に2人は恐怖と危機感を感じたらしい。

それはささやかに語り次がれていくことになるが、まだまだ先の話である。

その日は、目眩を感じるほど一瞬で時間が通り過ぎて行くように感じた。

…そして、悲しい人達の行く末を目の当たりにしてしまふ。

今でも脳裏にこびりついて離れ無い忌まわしく辛い思い出が…良く

晴れた星空の下で蘇った。

第十部

わたしの知っていることはすべて話した。

病室でのこと…立ち聞きしたこと…

でも、和将は信じてはくれなかった。

あのリストカットは薬をやめる為では無く…あくまで和将らを騙す手段だったのだらう。

とかけるは言った。

…和将は何も言わない。

かけるは、確かめに行こう。と和将とわたしを連れて佐伯と言う人の家へと向かった。

駐車場には元・仲間の彼の車。あいつやっぱりまだ来てたんだね。中に入るぞ。

かけるが先陣を取りインターホンを押し家の中へと何の迷いも無く入る。

それに無言で続くわたしと和将は…最悪の出来事を予感しては、有り得ないでほしいと願った。

一階には誰も居ない…二階へとかけるの足は向かい始めた。

階段を登っていると、不安と緊張で足が鉛のように重くなる。

ふと急に和将がかかるを呼び止め。自分が先に入ると言った。

和将の決意にかけるは素直に従った。

その家は静かだった…誰も居ないかのような静けさ…音がしないのだ。

彼達が居るハズの部屋からも…

和将がゆっくりとドアを開ける。

ドアが開くに連れて視界も広くなっていった。

そして…想像していたモノより何百万倍も生々しく冷たい現実がそこにはあった。

お前!!!

病室で会った優しい彼は
跡形も無かった

ガリガリに痩せコケ、

虚ろな目は空をただ見つめ、

口から…いや…穴と言う穴からいろんなモノが垂れ流れ
体のあちこちに切り傷があった。

血のベツトリついたナイフが佐伯と言う男の足に刺さっていた。

そんな中、一番に口を開いたのは和将だった。

周りのラリった男達を足で押しのけ彼の元へ駆け寄った。

肩を揺さぶり、頬をはたき、数えきれないほど彼の名前を呼んだ。

彼に聞こえるように…大声で何度も…何度も…

彼の焦点の合わない目が和将の方へ向く。

一言…ただ一言。

精一杯絞り出した彼の言葉に、私の目からとめどなく涙が溢れた。

《コ…ロシテ…》

『なんでや…』

『大志に人生かけて償うんと違うんが!!』

『おい!!こつち向けや!!』

『なんでや!?!』

…

…

…

…

『なんで…』

…

『負けたんや…』

…

『ダボが…』

…

…
…
今にも折れて崩れそうな彼の体を抱き寄せ…彼は何かを酷く我慢していた…

かけるが呼んだ救急車が彼達を連れて行った。病院までついていないの？

と聞くと無言で首を横に振った。

和将の家に着くと、ギンジロの相手もそこに和将はリビングへ向かって行った

ソファーに座り、何か考えながらぼーっとしていた。

いや…もしかしたら何も考えていなかったのかも知れない。

わたしにできること…まず汚れてしまった和将に風呂を勧め、着替えの準備をした。

バスルームまでもって行くと、ドア越しに和将が話しかけてきた。

『なんであいつは俺に何も言ってくれなかったんやろがなあ』

『大志には言えて』

『俺には言えんが…』

『大志とは器が違うんもわかつとおがよ』

『それとも…仲間やのうて普通の友達やつたら…』

『ちよつとは違うかつたんがね…』

『…かず…』

『…ゴメンナサイ』

『わたしが忘れてさえ無ければ』

『もっと早く助けることができてたかもしれないのに』

『あんな…ことにならなかったかもしれないのに…』「ごめんなさい…」

『ごめんなさい…』

『ごめ…っ』

『かおり…』

『ちょおこつち来い』

「!？」

(グイッ)

(ボタン)

(シャー…)

「和将…っ」

「シ…シャワー…止めて…」

『お前のおかげやが』

「へ？」

『お前のおかげで俺はあいつが生きとるうちに会えたんやが』

『謝ることなんか一個も無えんやが』

『…ありがとうな』

『マジで…ありがとうお…』

(…ぎゅっ)

『かおり…?』「泣いてもかまんよ」

「シャワーでびしょ濡れだし…わたしのコンタクトも流れちゃったし…？」

「大丈夫…」

「見えないよ」

翌朝、由実さんから電話がかかり、内容を一通り聞いたと話してくれた。

和将の様子や…わたしの体調を心配してくれて、もう大丈夫だと伝えると、ため息と同時に

心配かけ過ぎ

と、叱られ。偉かったね!と誉めてくれた

この人のアメとムチからは誰も逃げられないな…

裏のあだ名…

鉄製蜘蛛の巣

…捕まったら…逃げることは出来ない。

あの日の和将の記憶はわたしの中で一部だけ消えたことになってい

る。

そう、バスルームの出来事はあの日のシャワーの水と一緒に流れて行ったのだから。

第十一部

灰色ノ空ガ眩シイ朝ダッタ

：

：

暖かい。

目が覚めるとあなたが居た。

いつ起きたのか、漫画を読んでいる。

腕枕をしてくれて、彼の胸の中で見る夢はとても幸せだった…気がする…

『…起きたがか？』

「んー…」

『ヨダレふいとけ？』

「んー……………」

(ぎゅ…)

『おい…』

『俺の服…』

「ー……………」

『寝んなや…』

『服…冷たい…』

昼過ぎ。起きると隣には冷たい笑顔をした和将が…怒ってないと口では言うくせに…目が笑ってない

顔の筋肉だけで笑うその様は…私をびびらすには十分で…

…謝ろう…と決心するまで時間がかかった。

ドキドキしながら近づいて…後ろから抱きしめてみる。

怒ってます…？

と聞くと、

どう思う？

と帰ってきた。

彼の標準語に怯えた。

ごめんなさい…っ！と力一杯謝ると

和将は近くにあったテーブルに飲みかけの珈琲を置いた。

と、その時。急に自分の体が浮いた、びっくりして暴れることすらしなかったが。

寝室まで一直線に向かう彼に迷いは無かった。

寝室のドアを乱暴に開け、ベッドへと放り出された。

勢いよく落ちた私はしばらく目を回していた。

『…かおり』

「…んあ…」

『俺の顔見えちゅうが？』

「う…」

「…！！」

「ひえ！？」

『なん？俺の顔になんかついとうが？』

「…違っ…！！」

「や…近い…！！」

『黙ってみい？』

「へ…？」

『しー……………』

「…っ！」

（ちゅっ）

「…！！？」

『顔…赤いど…』

「な…？…！！」

『これぐらいで真っ赤になっちゅうが…先が見えながなあ』

「…先？」

『そ。先。』

（ぐいっ）

（ちゅ…くちゅっ）

「っー……！？」

（ヌルッ）

「ー……！ー！」

（どんっー！）

『……痛っ……』

「ばっ……！」

「ばかぁ……」

…

…

『やべ……』

和将は部屋を早足で出て行った。

私の体に残った恐怖感と…まだ未体験だった感覚はなかなか消えなかった。

しばらくして私も部屋を出たが、和将の姿は無くホッとした自分が居た。

携帯を開くと由実さんから着信があった。

かけ直すと、遊びに来ない？と誘われた。

由実さんの自宅へと向かう足取りは早足で、どこか和将の家から逃げるような気持ちに後ろめたさがあった。

それでもいつもより早く着いた由実さんの家…今更家には帰りたくない気持ちが膨れ上がって…今日のことショックで…頭がグチャグチャで…由実さんのマンションの前でしゃがみ込んでしまった。

…なにしてるんだろ。そう思い立ち上がるのに十分は必要とした。インターホンを押す。二度三度押してみるが出てくる気配がない。

…トイレかな…？

ケータイに電話してみた。

通話中だよ…

気づかないのかな…ドアを押してみると開いていた。

不用心極まりない

そっとドアを押し開き、由実さん？と呼んで見る。

するといきなりリビングから由実さんが飛び出した。
いや…飛び出て来た…かな？

香織？

「…おじゃましてます」

うんっ

早く入りなっ

「はいっ」

由実さんの部屋は可愛い。

ぬいぐるみがキッチンと並んでいたり。

白を基調としたヒラヒラとしたものが多く揃えられている。

私は淡いピンク色のソファアーに座り、出された紅茶をすすった。

そしてさっきから気になってたことがある。

………
由実さんの挙動が…不信だ…

…

…

…

お茶をこぼす

机の角で足をぶつける

ソワソワと落ち着かない。

ケータイをチラチラと見る。

………

………

………

………

私的診断結果。

「…和将から連絡がありました？」

…

一瞬その場の空気が止まった…気がする。

「しかも今日のこと…全部知ってたり…」

なっ…なんでわかったの？

「由実さん…挙動不審でしたよ？」

…やっぱり急には香織相手に秘密は無理よね…

うちは香織の口から聞こうて思ってたんよ？

「和将はなんて…？」

…やっちゃいけないこととしてもうたって凹んでるみたいよ？

「へー…」

香織は…その…嫌やったの？

「…キスですか？」

…ハッキリ言うね…

「嫌…って訳じゃないんですよ…」

…恥ずかしいんです…」

全てが初めてのことやもんね…

「私の…想像より…」

「本当のキスはなまめかしかった…です」

怖かった？

「…はい」

和将が？

ベロちゅーが？

「…っ！…」

「…どっちも…ですね…」

「急にうちの知らない男の人になった気がして…」

「怖かった…です…」

しばらく話をして居ると、由実さんのケータイが鳴り、電話に出た

由実さんが顔を青くして絶句した。

そして…私に向かって、…落ち着いて聞いて？と、念を押す。

何だろ。由実さんの言葉を待つ。

ゆつくりと彼女の口が開いた。

和将と香織ちゃんが…エッチしたって話が…

チームの中で広がってるみたい…

「……はい？」

今日和将に呼び出しがかかるよ…

「…なんで？」

「？てかエッチしてないですけど…」

香織わ…今チームの中で何て言われてるか知ってる？

「…？」

チエリーちゃん

「…？」

「…！？」

「普通女に使いますか?!」

まあね…

「…最つつ悪ですね…」

まあ…それを汚したらしい和将は…

みんなに真相を聞かれるみたいね…

「…汚されてないですし…和将は一応私の彼氏なんですけど…なんで…」

…にぶちんね…

「!？」

まあ…いずれ分かるでしょうっ

家に帰る。

和将は居なかった。チームの所へ行ったのだろうか…

ギンジロにご飯をあげると、しばらくテレビをぼーっと眺めていた。

P・M 10:00

遅いな…

さつきから時計ばかり気にしている。

…これって……

「付き合う前の…あの夜に似てる…」

和将のことが気になって…気になって…眠れなくて…

結局朝方にワン切りみたいなことしちゃったんだっけ…

ただ声が聞きたくて…

でも結局私寝ちゃったんだっけ…

それから…それから………

和将は電話を何回もかけ直してくれた…それで…付き合うつて話し
になって………

…

…

…

和将に逢いたい…

しばらくくずくまっていると、インターホンが鳴った

帰って来た?!

急いで玄関を開けた…そこには…

最近チームに入った新顔の人達が居た。

須藤

中川

鈴木

……もう一人の名前が出てこないや…

「あの…和将はまだ帰ってません…」

《知ってるよ?》

《今香織ちゃん…一人だよね?》

「…はあ…」

中川の話方は子供扱いされてるようで腹が立つ。

次に名前がわからない人が話かけてきた。

《これが和将の女?!》

《マジ可愛いーじゃんっ!》

…きしよい…

頭悪そうな喋り方でジロジロ見て来る。あとの2人は後ろで何か話してる…

急にお腹を殴られた。

痛みが体中に一瞬で広がった。

…気が付くと私は家の寝室で寝転がっていた。

…ただし…衣服を身につけてはいなかった。

下着だけの姿で起き上がるとお腹に鈍い痛みがあった。

訳がわからない。

霞む目をこすりながらぼーっとしていると、ドアが開いた。

《おい》

《起きたぞ》

その声と共にさっきの男達がゾロゾロ入って来た。

《香織ちゃんって和将とまだやってないんだろ？》

《俺らに香織ちゃんの処女ちょーだい？》

「…はあ…？」

…目が霞む。

こいつらの声が響いて聞こえる。

《ああ。あまり動かない方がいいかもね》

《こんなの打っちゃってるし》

目の前には注射器の中にある蛍光色の液体。

《体熱いでしょ？》

《俺らが冷ましてやらなきゃなあ？》

…笑ってる…

こいつらが言っている言葉がわからない。

頭が…重い。

その時、急に私の体がベッドに押さえつけられた。

意識が驚きと共に戻る

暴れた。

必死で抵抗するが男達の力にはかなわない。

腕を押さえつけられさらに薬を打たれる。

体が過剰に反応した。

泣き叫んだが、呼びたくない名前があった。

和将…

こいつらの前でこの名前だけは…口に出したくなかった。
体が熱い。頭が…意識が飛びそう…

和将…どこにいるの？

逢いたいよ…

苦しいよ…

ドコ…？

助けて…かずまさ…

目が覚めると…病院のベッドに寝ていた…

右手に感触がある…

暖かい…

…

「かず…？」

『…！！』

『香織！！』

『起きたんか！』

『どつか痛いとかないか!?!』

『気持ち悪くないか?!』

真剣で…でもどこか泣きそうな顔で話かけてくる

『どつか痛いんか?!?!』

「…ん…大丈夫…」

『このままずっと起きんかと思った…』

「かず…」

重い鉛のような手を和将に向けて差し伸べた。

…

…

「おかえりな…さい」

少し微笑えることができた。

和将はソツと抱きしめてくれた。

肩が…少し震えてる…

だいぶ力も戻ってきた。

その分強く和将を抱きしめた。

「好き…大好きよ…」

『うん…』

その後は大変でした。レディース!?!の姉さんらが泣きながらお見舞いに来たり。その時は由実さんも泣いていた。

他にも仲の良かった人達が次々とお見舞いに来てくれた。

ただ…あの日以来和将が来ない。

仕事が忙しいのかな、と諦めていた。

そして、1ヶ月後。退院した。

由実さんが迎えに来てくれたが、車の中でもあの時の話は出なかった。

気を使っているのだろうかいつもの由実さんだ。

電車を使って私の自宅に戻った。

鍵を開けると、広い空間が寂しく思えた

実家の方に帰ることにした

実家に着くと、

元私の部屋に入り、殺風景な床に寝転がった。

あの日のことを思い出そうとするが、途中から記憶が無い。頭が痛い。

思い出すことを諦めて窓から空を見上げた。

一時間くらいそのままぼーっとしていると、玄関から音がした。

（ボタン）

無視を決め込むと、階段を物凄い勢いで駆け上がる音が聞こえた。

…お母さん？

ドアが轟音を立てて開かれた。

そこには

：

：

：

和将…？

：

「和将！？！」

ビクリして勢いよく起き上がった。

そこにはスーツが着くずれて汗だくだくの和将が立って壁にもたれかかっていた。

『なんで…』

『こっちに帰ってきとんど…』

「へ！？」

『なんで…！』

『俺んところに戻ってこんのぞ…！』

「いや…」

「忙しいのになって思ってた…」

「こん…つつつ」

「ばか！…！」『…帰るぞ』

「…へ？」

『ほらっ』

「…ひやつ！？」

かつがれたまま階段を降り、家を出て、前に停めてある和将の車に押し込まれた。

広島に向けて真っ直ぐ進む車の中で、気になっていた話を出してみた。

「…嫌いにならないの？」

『…あ？』

「だから…もう処女じゃないから…」

『…なに？』

「へ？」

『…今…なんて？』

「だから…つつ」

『お前はまだ処女やぞ？』

「……なんで…」

「うち…確かあの時…」

『記憶が無い』

『違うがや？』

「え……うん…」

『お前やられてねーがよ』

『新人の一人がゲロったが』

『あの日噂流して俺を家から離れさせたこと、目的は好きな女を自分らのもんにしよーとしたこと』『今そいつらが香織の所へ向かったこと。』

『全部話して…助けに行つて下さいて土下座したがよ』

『だから間に合えた…』

「……」

返す言葉がない

ただ…肩の力がドツと抜け、涙が溢れてきた。

我慢してた分。一気に泣きじゃくってしまった。

その間…和将はずっと肩を貸してくれた。

和将の家に着くと、一本のビデオテープがおいてあった。

香織

とだけ書かれてある。

和将がそれを私に渡した。

処分はお前が決める。

そう言い残して風呂場へ向かった。

…撮られてたんだ…あれ…

なんとなく再生してみた。

そこには、裸の私が暴れている。

男達が私の体を押さえつけて…

注射を…

…

…

あれ？

男が一人のけぞって倒れた…

…大事であろう所を押さえて…

そして…私から見て右側の男も…

…

…

そこでドアが開き和将達がなだれこんで乱闘…

あの2人は…？

ビデオを巻き戻してみた

そこで和将がお風呂から出て来て、丁度問題の場面。
和将が一言。

『えげつないな』

…

「もしかして…」

「これ」

「私がやつ…？」

『あれは不能決定やがね』

「…嘘…」

『俺にはやらんでよ？』

「！？」

「しませんっ！」

『じゃあ…俺は香織襲つてええんや？』

「やつ」

「それは…っ」

『いかんがか…？』

「その…」

『嫌？』

「……………」

「嫌じゃ…ない…」

『じゃあ……』

（ちゅっ）

「……………」

この後の事はご想像にお任せします！
でも、この時が一番幸せでした。

長くつたない文章に目を通して頂いた貴方様、本当にありがとうございます。
ございました。

よく目を休めてあげる事をお勧めして、後書きとさせていただきます！

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028a/>

逝きたい人・へ

2010年10月22日00時15分発行